翁古池芽身之肖像
御尺三尺壹寸
夜未謹彫刻

楚堂敬縮寫

翁堂之圖

江州國分山之圖

翁の肖像を作りて推古城主と共に山のほとりに懐古

八幡宮

経ヅカ

幻住庵

小ナゼ

うぐいすや
まぼろしの
道の跡
秋来ぬ

昔より風人騒客の多くこの中を吾芭蕉翁を慕ひ幽境くだくだしかるべしとて柿本明神の傍に庵を結ぶ

月の影の空うなくて風もなき夜の空

れ法師の門乃堂ゆるされたるはあれども柏原天皇の流れとうや明暦年代
国おのくのうの義堂家より流れ官職無名なれども繁きやうも風雅を志
深くして主君と共に和歌を学ひあひしゆゑにかりにくき君臣別
きりしより世をうきものと思ふとう一向致仕遁世されたひ生涯を
世の称くといふ世えより風流を楽むつよ教さうとうきなく
汐てをいつを始へきやとそ釈尊意絶れ昔をきくひ親山上皇れ古来
らひくそ玉の園ゆまきれ築墻れ雲を越一宮くに懐つ別の厂とや紅を
居ものひぬかれれ二度ハ五れ法初累られうと矢者とい玉ひて法れ
まめて家れ行末を見れぬ今ハそれ私ら得よ浮法ひくそ多数の旧跡を
やれ寄むむ（忠臣の二字ハ枝葉張遠侍てふものもとと
の川佛項師の禅よ者をして法嗣の血脈ともに親青のみ
かしとそされた宝蔵寺懐古れ吟よれ本歌も居を贈る
まやあくむたくに武義時内原を踏分てれ正風れ道絶をく
古代の者を千歳よりたくと東西れ侍ものを手きにそ千年まよりたくと其義

又逸といふをもとまる物の意

とい称しる多盤よ西を伝ふくにそ源川のを系統居行果盛殺のえを代
橋ハ沈れ遺跡ハ多るくしあるれ時ハんのようる松ハ雲れ月よ嘯永源
の浪よ伏をしほる海者理やよ帰の舞ちんちくくれ海道
小浮世の垢をきくき和歌の浦の玉をおくきれ侍
ゆ消盛れ芦をたちなむ漁や近ハ乃紋系よ帰りてれ先ん新文
れ一橋の者りも実よ幻の侍者なるくのちの橋一菊ん乃侍
代ちく小田のりをやりと一朝を張よ遂つひ小浪舞よ拍子の長
を結れ多一百年来殺喩の忍をおりひ池を義ひて拍さるゲ
あ一まる隆者三百余人本る度と脇中ゆ乃せよ踊ものこれくの
遺跡ハ侍れたるを世のちくなるを侍後の世よ知りてもるは余れ
いやまくよくく雨縁りあるれなきをまくもの禅と号して達さ
ゆ書よあり乃て三百余基ちくれるとの義詳名生ものハ科機
一基乃跡絶なりしを余沢を面世よ侍ちくの海の知り明ちくん
や和漢乃湧士釈ハの侍像よ刻ち浮圖よ作りて先ん哲先ん考の

伊賀芭蕉塚之圖

神を雪堊を拭くに風も忘れし涙を所々の俳友とし侍りの
西原川の社使白碑を造せん志久し[illegible]
[illegible]
[illegible]

寺之圖

粟津義仲

夫風流の心をとなへて世の事ホ
とゝなる人をもれ法乃真髄をせ
ぬ徐ゆゑ其ゆゑ情をまして其
和を長む人い天乃系の聖と
されい文明の世さ乃盛むなりし
聖達代言葉今乃技と宋て
実ある事今代人のもてさしを総り
ゑ一をもれる風雅流の八天地
と共ゑ接りて只ちゑぬをゑるむ
きやさ乃ゑれ宗祇宗鑑武
は蔚像をれめて世乃氏好詩人
の筆芳をゑり我て世さ一百
をつゑりてこゑれ乃と芳古
まゆゑむゆゑむ事をつのるを
月ゑれのゑれや　えゑ
まゆゑれゆゑ　遠

何のあそ堂ゑつれゑ水ゑつり　三百　柏秀
灯のきゑぬゑゑゑきつゑゑ　赤　著机
杜丹人ゑまゑゑゑゑ男子　岚崖
四ゑゑぬゑれ乃ゑ　新ゑ　ツヌキ　茅言
並松乃新きゑんゑ四ゑきゑり　小竹
六月を取てゑゑる廣乃ゑ　ハリヲ　乖仙
故ゑり黄ゑゑる此白する柱ゑ　三百　橘光

曙のちりとゑゑ人ゑゑ芝乃雲ゑゑて　至清
咲花やゑゑい何ゑゑゑはけゑゑゑ　奥七ヲ　文蔡
搗ますゑゑ我をゑれつけゑゑ月、　草交
春ゑ月四十を経ゑ我ゑ紛ゑ、麥ゑゑ　子敬
四壁ゑゑ明る酒店の
燈酒をのゑて　ヲハリ　泛若
世者ゑ文君なきゑゑ掃ゑゑ芝
秋の乃掃ゑ明りを流ゑゑ　ハヽキ　花叔

来る嵐ほのあしよ立古る　楚亜

大きな紙屋

弾数をとる移り時雨る袈裟（イヨ）　春耕

義経屋敷より

時雨や椎の木うけハ眼の前（東京戸）　三夏

幸を山ハ時雨る雲の一ツなり（ヤマト）　雀蕉

松の香ハ時雨ぬ（ヒシコ）　一色

中秋を望るらるる祝ひを　夜来

楠の中や芒ハ花はなり（三ロ）　欽外

毎日の夜ちて人家や玄木槿（イヨ）　文伝

松ち金嘉もつきて村雨来　逝柳

名月ハ時ゆる中ハ花ちる外（カハチ）　風蓋

茅ハ花ちる花ちる人ハ（イガ）　杜園

行秋や芒ち点ハ風の雲　辰角

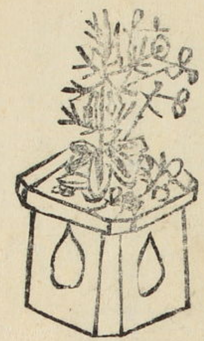
定家
舟漕ぐ
宮屋
秋の夕
嵐雪
垂柳窓
孤静

東風園
蓮柳

空山不見人
但聞人語響
返照入深林
復照青苔上

三ツ物ハ百韻千句ニ跡ヲきそのを是は祇園社憲世ノ夢座懐ヲ祈ル云
ト夜ノ尾
第三の句り何ニても構ハぬなり　表舞と云
ひ三ツ物とハ祇園祇紙
ヲ以名目をも嫌ハぬ
は一句の曲言ところ
ひるといふ句なり

蓬莱ハ山をあらそ
ものみん　長雄
ほうらいの玉ハ一本
のあをひろれ　桃士
出入れ古きまりとろ
門ハ　梅青
ものるの門ひろけたる
れ　芝か　奥州　遊二



海老ハ　寿命長久
田作ハ　田つくれば又穀豊饒
だまめハ　息災壮者
穂俵ハ　俵
橙　ハ　代々
栗　ハ　お少
昆布ハ　悦ぶ
梓　子ハ　幸ゝ
小殿原ハ　子

和秀

女清舟
道明

我家の
知もさ
高さ哉
かゝつもり
水無
鷹の人
焼ゆく
琵琶庵主世
春日山
蓮本句

摘要ハ　狩
餘辭ハ　うすれさ
歯學探ハ　ひゞかず
蓬莱日本のあるさを
一つ明ける

熊坂　富士
熟田　加賀
白山　住吉

雪の白ぬ蓮の花ゆ高ぬて
生くるとり哉住吉の海
正月の余りうるさ
けりの家　雲外
下蔦れ庵さくら哉
眼乃雪　春雨
徒ゆくりとれ春
も移ろ　夕集

日蓮　萬言
新たさを
蕨別
さや
夏の月

南陽軒　花栖
明け
暮る
歳
流れ
あの
ふ

東海彩
花栖
松風
いつても
吹けと
二月
信蘭亭
生我
琴柱の
琴
琴
清子

文房具図
堅一尺七寸
横一尺九寸
高サ三寸二分
探題
箱乃部
堅三寸九分
横七寸二分
堅五寸
横一寸
四方
拾ふとも尽
二見の
浦の貝
大さ代
玄蕃も方丈や佐保
姫立国玉兎
二柳
寄て折れ寄て
ちの法華葉
右
長来
永き
むと
は
ふ
かくる
山の形
三市図
知久亭

敬之

人絶の里を梅に問へまゐる　杜見

窓前に梅の香　[illegible]

梅の香に[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

梅の木は[illegible]　梅渓

[illegible]　一渓

公梅を今[illegible]　篤雅

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

起も小原の　班竜

[illegible]　文操

[illegible]

[illegible]　千交

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　孤[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　公路

[illegible]　仙[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　兆玉

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　亀仙

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

金花樓傳

諸本花とかくハ陽氣乃発顕なれハ極張字義の発れ色と字く車部一故ニ黒き花ハ〜とつ

神代紀ニ風雨ニ云ふより多分あめと俗多とかくハ文字ニ付くはるべく風雨と字をあめとせと後ハ〜和語ハあめとせニ風雨と連続字ニ別ハたるハ漢字と偽字ハ神代乃まゝ用ゆ和書ハ風雨ハ多くせ山陰とうもやま豆夜ハ多くひる文婦ハ〜ものとの教ひ

年〜と云

紙ニ條と引く書と称ハ孫とも称人あり朱文公の文集ニ野行と出る

福壽福壽の春花

一茶翁ハ此ハ俳諧ハ花堂
はるの山 連立て行ふ雲の春 千子
我新とそんてもひく 花堂
春は福

し春の
ものの
さつぱれ
るるる
杜園

雑ハおろかなれ名代命と云る
し神ハ皇室霊ハ神子
それ故一ちゝ
ぱり義命を神
と云 大巳貴命とちゝと

山橋
文代
知時庵
春耕

社中を云事八幡山乃惠
慈法師定隆の益池や
白蓮社と云創清武雪次宗
宗炳の十八人集会して
交を明月見て十八蓮社
とも云爾霊運ゆられ社へ
入んのとも云惠を運う
ん雑ゐるとん文をゆる
さんうる実白ゐる文有
吠集会をなせりより蓮社の
文とも云ゆるゝ芭蕉比丘人山
口素堂ゝ致仕の後深川北別
荘に住を宗ゐ蓮と称て交友
と集め蓮社に擬をれより
非浅乃ゝ社中と云ゆ流り
しぬ文遠陶を慕ゆ蓮会
社へ入くゝゆを見されもれれ
一社盟友の上を固守ゝ

寅ゝ歳
搖を
わゝ
雲
ハ
ゝ
ゝ
ゝ

序山

と上下ゆおきて寄ゝゆる事
ゆゝを人ゝとゝ一人者を世代
寄ゝく設者ゝ行ゝ上ゝ天ゝ
現ゝ

ろくろひく遠ひ代恩のり
ゝ一部をゆり者ゝ
さんゝゝもゝさの針ゆゝを
ゝゝゆゝ――天平元初年
大鋼を宗親を敗ゝ一時く
小素菱ゝひゝ一ゝ場手
続ゝ内ゝゝゝゝとゝ
ゝゝゝゝゝゝ遠ゝ
ゝゝゝゝ

仁徳天皇十四年冬十月猪耳津
木橋成ると日本記ゝ見は
ゝゝゝゝ

郎乃義や都ゝ仰ゝ
ゝゝゝゝ　湖水
部ゝ七夜　初ゝ
七ゝゝ　蔵六

ゝゝ清て越峠　繍丈
畑ゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

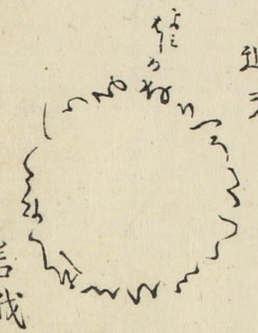
いつ迄も
かゝゝぬ
清代を
神の掾

緑二

這入てうをよ
色香
まうて
家の梅

雨の気と吹月も寄く
苔れ花　三津人
柏まとひとゝ多都ゝ
やゝれ色　河曲
秀田帰く風や色色
れ叩き証　三貫
苔のゝれ者乃けあと
指拭ゝれ　梅老
暇れ一生を涼一寸
一乃な　文桑
朝乃手と蚊ゝ奏ゝく
れぬ我ひゝり　花友

廻文



若洲

寐ち つゝ法
門ゝ家亭
乃ゝ梅　巣ゝ居
楳老

あゝと書れある商ゝ
ゝかんこゝ
あゝはの窓あゝゝゝ
ゝゝ竹　益山
桃の花ゝ　湖芳
一杜乃
一扇
塘ゝゝぬ里を旅
の心ゝ　芳
月乃窓ゝ
ゝくゝ　巣
和秀

寸法
大色紙　竪六寸八分　横六寸
小門　竪三寸六分　横三寸分
大短冊　竪二尺三寸　横一寸八分
小月　竪三寸六分　横九分

○青箱みとゝ寸法
曲尺ゝて巾六寸京

新
起乃
ゝ
日
永
ゝ
ゝ
ゝ
杜母

秋花亭
永羽

三五

南枝館
一陽

八月名称也とかくても
面白し　ほの　舟
名月ゑ　ゆふ　ふ
雲ゑ　ゆ　ゆ　ゆ

春[illegible]三月中旬過く
春[illegible]濱ゟ
あゝ[illegible]ハ夕し帰ハ朝し
桜森ぬ色ハ乃く　時雨
千ゟゝゟとゝ色し
余ハ四季部　[illegible]

一年を四季ニ分ち春秋ハ春秋と人唱ル日の極永きも其至ればも永き日ハ春之夜の極永ハ夜至なれ共永き夜ハ秋し夜ハ春に余りし故ゟ春秋の余りし故ゟ連ゟ春ハ春秋ハ五百ヨリ七百ニ至り夜ハ三百ヨリ五百ニ至ル偽ゟ春秋ハ三百ヨリ五百ゟ夜ハ二百ヨリ三百ニ至ル寅之去燥乃年も又百繰ハ五百去リ三百のりのハ三百去一ニ年ハ共季多きハ働ゟ一百ゟ一百ヨリ二百ゟて捨ル

兎竹ハ延ぶ　樂哉
兎竹の口破り　亀雪
秋ぶ
沙吉水くつるや　蔵重
松よゝるの月
山茶の陰接し　月長
ゝの赤ハ是ゟ　ゟ拾
られて林の雨　女
中の戸ハ史よゝも　花咲
ゟゟ拾九ゟゟ　女
裾ゟハ用ゟ　宗徳
さよゝ鶏の軒

十七点
兎竹や夜を
原ハ赤蕨主
ゟ　ゟゟ

猟人の足て切る
北りう切る
佐夏
日ゆう
今夢一一業の
詠の秋の空
楚堂
竹園
翠緑
貫雪
海山
留林房
蒙雪
お
茂
て
て
なし
鎌
時

立田
二首
藍絲
煙り
柴の煙

義堂の自刻せる
義の像を安置
きりて　伊勢二社
鳴呼義外よ仏よ　杜園
あるも問まじ門の
椎の木　陳蕉
うく出る花の外は　飛陳
何なく
森て鳴る夢子は天　玉泉
忘利　ゆり
南の月山乃木葉　曉亭
ふきしくり
ゆいんてねを寄の　友言
ゆくく
義むしれ三ゆて御れ　一奪
妖婦あく
二度まて鳴くうく　可明
川乃せよ

仙亭

つの
ぞる
東くゆうし
ゆ遠ゆう

燈窓唐
義哦

靜
あまりて
声や
鶯
物

欠出ゆ人ゆ
ゆるおろきを　陽化
ちりひろあよ　杜よき
ちゆれ　涼山
風ゆ　昭義ゆ
乃ゆ　昇山
あちふちれの　鉢ハ
ちりゆり　芋経
ゆは　ひ
て　杜會
右一化

親鸞ゆ
しくれる　梅志
恥しき　義
時　乙瀧
木乃　吹乃
谷ゆ水　一色
雪ゆ　陳
昭義と　義六

瑞芝

本丸ふかき中より月
ひろ樫廊　寒雪
くらきより雪ふり入　巽山
明り夜真り
をのいろく樹の葉も　宇都保
くきりくろり
月有る都ちくれて　花栖
寒れ入
百性のかめを呼やさき　序山
小ちくれ
雲れ雪りたりちろ　雪雄
ちへ主
よろ降ぬ小家れ　甘蔗
蔵ふる
雪よ入時刻を待や　玄蛙
秋のくれ
丁時ちく夕へをゆる　久花麿
雪ふる郷
みれ月日ろろ山す　春水
さしよくり

瑞芝

風雅

蕗の香は みろく五
て年古　方孫
そのく寺門花の色
と第ふろり　一陽
君の松猶くしく
君えくれ　柳花
朝ろくも夜ふろ月ね
天三十日　桃士

酒香て　夏花
庵ても　庵ら迄も
すゑの月
カロ

風器

(心)いろ紙も達ハ　寄閑
すしう樫多
(ろ)樽にろる　汐の
ろやは　秋　景枝

(は) 祖月ハ若き木の
なり砂遊れ落 鳥老

(ほ) 海りの中に
あれ流れもも 北玉

(ほ) 横の書をとれ
ふてや 歳月 虎校

(へ) 一ぬけ枝も
おとしの為大 宗波

俳雪ハ
吹革
まつり
乃
一書を
二中

土月八日 熊治 稲生山に参
事ハ宗近稲生山の地と云
て刀をとりくさを拾れたり故
よは頂を家の神恩を謝せ
る為ゆえ稲生山参り 蕉

(と) 少しなれて花ハ
ゆり柳柳 三考

朝山と
いろつ
きむ
きとし
寿号 康波

寿号ハ仁徳天皇代御宇の義
より貢ハれたれかとうちとも
酒君とも人皇結を負て始
てとも云うせしより代られ天
お大臣公行に教とられり
其後中納言成教と云人
柳又劫敵なり今俗俗
せハらいとも云人のより
中物をうとも今武氏
の教物とるれり

(ち) 都をこれ梅の
まつし咲のれ 天禹

(り) 理屋ゆき曙
ホこの 杜丹 寸枝

桂兼樓
湖水

踏

足あとの雪の踏

ぬ 踏ずに下駄の足あとの雪 延蝶

る 踏ずに戸の雪や菓子のかくれ 楚堂

を 踏ずに戸の雪や枕の蝶 羽竜

わ 踏ずに八重の雪のくふのひるれ 自乗

か 踏ずにうまくあるいてとゞかぬき 三校

百日の下駄はきやなき 楚堂

よ 踏ずにふる雪の雪 南之

た 踏ずにさくらの雪の雪を枕ぶ 涼山

一字館 ろ十

遠浦

遠浦や沼も

抽て

峠雲 花

美石堂 方珠

れ 連翹乃美ハおほえねて花れ時 蒼吼

負竜胆の板ゆて折ハ素絶よりて春ゆれ乃紋付たるとゆるる板ゆり衣のおとくまあ〜たゆたゆ衣ゆ瓶仄後之とぞ

う 空蟹乃おゆる眠きあゆる深 房行

つ 月草之ゆゆも暮ゆ花山吉 蘇秀

ね 稀ちゆるゆゆ稀ゆ山の家 嵐星

た 昭堂山田ゝ 松有

ら ゝ ね蓮の花 歌未

む 村雨のもゝ 星流

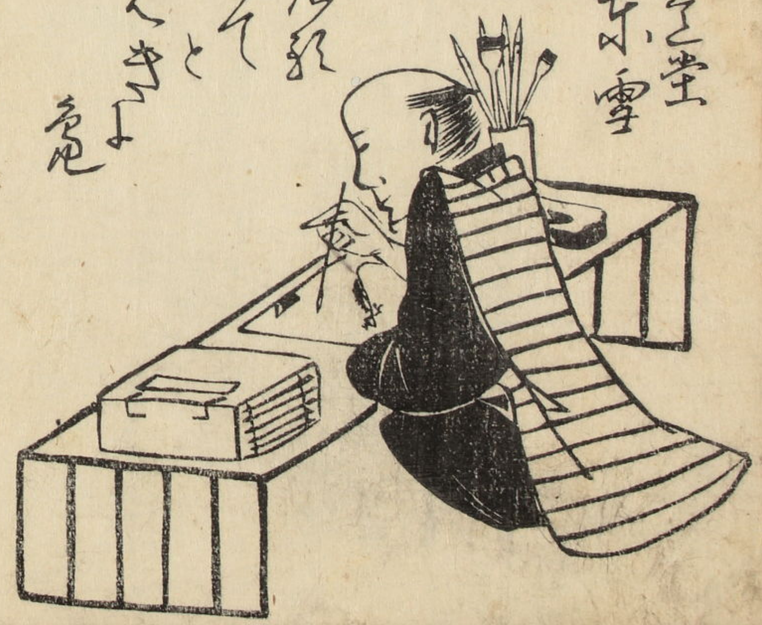
孤山

う ゝ 鄭子

ね 昇山

の 喪橋

れ 二中



く 谷人

や 久長唐

ま 小鶴

け 乙二

ふ 又粒

こ 谷雄

活堂 二中

(ほ) ほの香や　ちる　井眉

(て) 所けや　ゆき　梅く

(あ) 作句を一声　其正

(さ) さく浪や　蔵見

(き) 　一斎

(ゆ) 　亀仙

(め) 　松欣

(み) 　川人

手習立春ハ和歌ニテハ春も連俳ニテハ冬と定まり歩と四月ゝ一歌ニハ春ゝ冬ゝ三冬ゝ

理竜

春の味噌

つくづく　おもへ　ば

書つ　本乃　芽

古人乃あゝ　ろをこゝろ

春咲るね　杜丹也

花の心や　梅ゝ草

松とゝさまれき寒戦定むる事　宗易けるゝ　みゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　

歌仙ハ略式し故ニ連句ハ
美想冗キの外ニ高仙とも
ゆ以〳〵其時ハ連句十人ニ
一人五句とする事もさるハ長
き時ハおのつゝ思ふ事ニ
いつれそ

高仙ニ十八変の句合とう起
れるくを漢人十八人ニ高仙
とゝる故く中れ句と上下
とわけて三十六句と米せゝ
○百顔八本式ゝ以下中顔句仙
多皆撮略の事ゝ
○五の仙ハ略式ちれ共義ハ長
徳の元よりとて是ハ

也 [illegible] 行雨

寸 [illegible] 風器

糸 [illegible]

正月

五行ハ黄金高といふ字
を放蕊の中に英花を咲
くとし道ふ八重大さ
て美仕山吹に似より
夏根人多のごとく殷根
あり此字本火去金水
の五行を具し五徳
を意しらす脇を
浦ふ五行ハ五味五時
土穀五苦五霊五天
五相五穀五明に配
すと云て意

雪明堂 蕎人

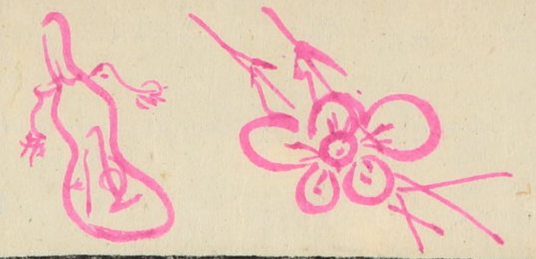
神無月
きのふハ
菓乃
うら迄ぶ

此ごろ芋蕨の二種を
加へても七種と云
又佛前を報節とも
云もあり

神く稲や元度ヤマト
より曙の神く 度江
賞と伺ふ庶ま
小ふ八ケ 松府
天相つく見も
大陵とも云て 楚堂
呉中ま 彩を 天命
の世て江の雪 芸鶴
鶴月庵ハ菓 巴龍
てこ叶源し
往蒔や昔の時サヌキ
て来く時く昔 弱房
旅人も来ぬと
柿の雨京 夜来

吉月 巴龍

猫ハ
畑ハ
特
祢
と
蕗の
薹



二月

元正帝の時宇稲荷
影向の日 偶二月初午

二月

夕日さす
雲の
晴の
好こ子

日故ゆ今ゆおて此日を
用ひ諸俗初午詣と
称し又福参といふ
初午の日を用ひる
稲荷を祭るも尤
捷之気
○世ゆ狐を稲荷の神使
と云ハ元明天王和銅
年中倉稲魂神
初てあらはれ給ひし時三
狐天降りしと云
故なり
○注昔ハ神社へ馬を
献ず是を神馬と
以神号を称する
力及ぬものハ木を
作り献ず是又及
ハざる人縛ゆかさて
献ず故ゆ絵ゆるとい

牛瑟居
ゆ〻乐

好こ子の
好こ子
親
尺さ
童の暮

紅梅や殺風景な井戸
端の柳　千代

水ぬるむ時の音ずれ　良月

三月

春ちかぬ枝しはりて
あるうらの花の蕾　梅垣

ふるうす
すしさ
うす物の
春の
青葉哉
寿樹

梅の花の春の雨　梅渡

ハヤ山の
ゆりとなって
花の蕾をそなえ
ちるを惜ぶ　花叟

ようせもって
ようの山はくもり
なくもあり　光花

あこめ扇　檜扇のちがい
あるものハ唐土ハ孔雀
唐扇ハ孔雀を表式合
まて中を雉まて張
るようしく桜ちるを今の唐
扇ハ後世の拘之五雑
組之云大明以来唐扇
しと扇を扇と云
扇を扇ハ来ふるを扇と
云ふ元禄中の時ハ扇の方

植名舎
玉叟

有ふるやう
田ふ
る
色を
ふ
ゆ

と懐中へさし入て右の婆
の手元を留さしうしろ
さまを久公及さし尤
所見なるハ有しと云
中華古今注五明扇
舜の所作也舜受
堯禪廣聞視聽
永賢人以自輔故
作五明扇秦漢公御
士大夫皆得用之
賢人の示くもの付ハ刀を是
非ハ抜く公家ハ狐光
もめ〻ん死た麻園張義
内敵の後ハ底ちくよ者人
ハ逆るのハ小刀一本ハ殺さ
れまたれた丹波を学ん
こ〻ハ紙ハ手紙を
抜代ハ次のうなて扇を

大戻抜
梅渓

さ浪や
雪の
うへ
ハ
なる
抜

抜てもの〻ハ人ハ危
なて抜ハ扇抜ハ及ま
小刀をさしてもんと抜
ハ本人も扇とぬく
〻ハ手の足利家の日記
ハあり

四月

初鰹
うち
ハ
うち
ハ
ふく
の
ぎ〻

扇ハ是て礼ハ抜りの〻
重者を凌く唐半の抜半

雷や
さま〻
食事ハ
抜
の
穴

風〻亭
唐行

八月ハ初日夜よりも初ル
八月ハ半人の前にも持ル
ル物と是ハ実に小刀の
代りに用ル扇と被礼の事
なれハ忘ル扇い礼ハ立
ものなり

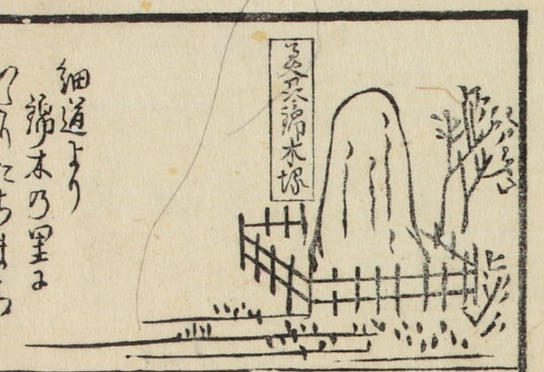
日をつんで夕日よ
りハ桜葉ハ豆腐
うすしと四月おやと
ハ二月半
ハ菱
なの戸よ半ば
日のまり芋付 丁正
すてよ初ハ明て
芋も竹の芋 是雄
かりの名ハ豆
とて嘗よ 信月
食嘗なる年よ
ハ芋ハ芋の

五月

年始粽ハ茅萱ニ巻て
巻て故ちまきと根元ハ
和加菖中の々より粽
粽と云物と初て制ル
云今ハ丈迄ハ故ちまに
乃ちる人ち一今の道花

猿の形芽萱ゑて
芽と云柳の新芽先と
くりくりとも文様焼の
壺の花生と若芽書と
いえども形よりてなるべし
無芽書荒芽春宣
言ちれたる好賀実の
名ちれハ咎へなし

白雪のくりくり春サメキ
水や杜鵑
夜山や月のゆく
神と事すく
弧山
くりくりと見事
炭ゑけや夜の山
川柳やこも庵
ゑゑ月のちり
夜山や月のゆく
二有イケタ
弥生
花優



細道より
鶴木の星み
つくりたちまち
果雑の情を
おうた
にしあるや
石ゑ夜を嘶
かんこゑ
寿

神掩や
ゑ鈴
とゑ
ゑむる
笛袋
肥奥産
慶江

六月

春山や宗の節
多く鶯あり　岩寿
山の鶯を初聞
して鶯あり　梅鳥

御薬園の候八近江火
切の堅より貢る京今
恵王の分
さいのや流の山をあれ
ハ兼てを見事の君の
おとせは

花優

ふ事の
なこの
れ
橋
乃
夜の
うち

辰角
玉吹
庭柳
唐山
雲卧
孤静
宗徳
一色
子瀧
杜園
紀嶋
随明
白羽
蓋緑
和秀
春斜
等言

矣別岐園五戸祢談
日
江別塩津
濱別仁保
備後麻通
矣別岐園
伊賀名張
日
濱別仁保
日
南部神職大神集
矣別岐園
伊豫今治
濱別稜麻

炭産加多藩
入江作多藩
同　女　堂上
旭日山福　桑流
同山　巷　正　院
中村佐右衛門
濱産又右衛門
本野孫茂治郎
近江産市之助
中村吾左衛門
伊勢産佐之藩
白田山為右衛門
辻　仲右衛門
素　素　素
巷谷吾右衛門
柳原　好　助
陶山治左衛門

若狭国
一東雪
一陽
一秋二
二浪月
二翠
東野
乃十
一梅雪
一中
梅渓
鳳行
南船
白鳥
鶴山
義六

和列名梅
日立田
出羽妙田
和列邪山
日
奏後国東邪峯岩山
何列三日市
奏列爰国
和列立田
備後尾道

小林安右衛門
日下部彦右衛
薬原　道頓
吉村彦兵衛
仙光寺
法願寺
長谷川文助
前田平次郎
小倉屋吉郎右衛
藤助
秋年長左衛門
永原八右衛門
文孫仙寺法印
梅五郎
中村梅治
六斎寺
酒屋松右衛

瑞芝
二有
湖水
宿雪
花柳
藤彦
方蹄
梅光
三巴
巴流
可楼
度江
郊祐
里京
義人
紀久子

伯列三湾
和列立田
日
奏後国東
三列東南
奏列爰国
和列立田
日
日
邪山

常吉八郎右衛
小松右衛
湖彦
井上萬
清水清右衛
和泉屋喜之郎
三木弥三郎
中根埴助
久保田傳右衛
糀屋四郎右衛
東江右衛
丹波屋東雲
野戸佐助
小鴉藤助
秋本作右衛
遠水治右衛
潮戸物屋平三郎

文部
光顔
宗祐
生我
つる
戒雪

和品俳句

日野 奢 別所 休 大場屋清之介
坂田屋伊兵
九屋つる女
武田和平

集一宮市千句集 秋句篇

右

石陽妹山庵蓮舟 嘉世橋本喬二 宵月亭 春夏朋句

俳諧百人一集 乎編

白雨 牡

草義文集

同白集 百編

外六七郎集

俳諧節用集

同名所圖繪

同今古略人傳

奥細道評論

近刻

月 月 月 月 月 月 月 月

今
行
人